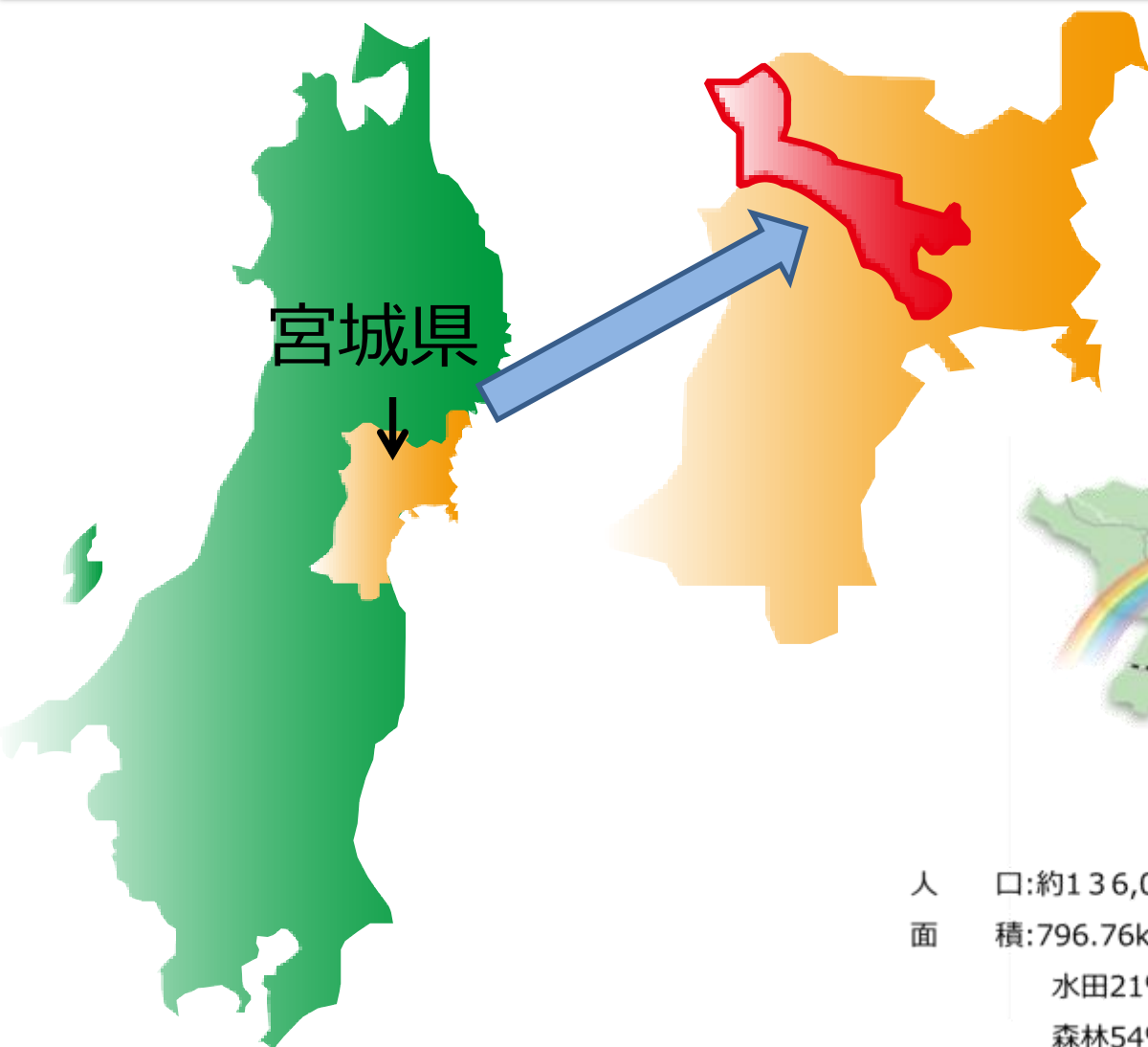


**生きもの共生型農業を核とした
持続可能な地域づくり
— 蕪栗沼・ふゆみずたんぼプロジェクト —**



宮城県大崎市

宮城県大崎市の概要



人口:約136,000人
面積:796.76km²
水田21%
森林54%

大崎市は、古くから米の生産が盛んで[ササニシキ]、
[ひとめぼれ]などのブランド米の誕生地として有名

- 山間部のブナ林から湧き出でる2本河川は肥沃な大地を潤し、水田地帯が広がる。
- 渡り鳥「マガン」の全国最大級の飛来地である2つのラムサール条約湿地

山間部

80km

江合川

鳴瀬川

化女沼

蕪栗沼・周辺水田

水田地帯

©2013 Google 3

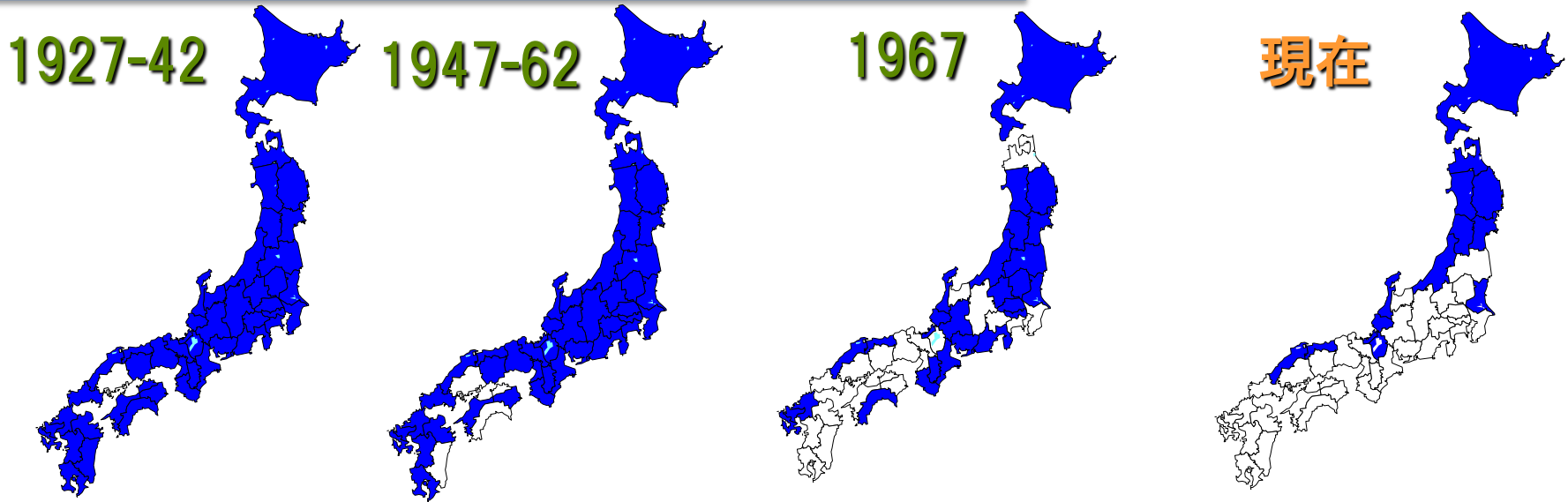
計画の概要

期間	テーマ	課題	政策・計画および取組	行政制度
第1期	ふゆみずたんぼ導入以前	渡り鳥飛来数増加対策	自然・野鳥保護関係者と農家の対話の場の設定 沼隣接水田「白鳥地区」の湿地化、常時湛水	・食害補償条例施行（1999）
第2期 2003～ 2005年	ラムサール条約登録 湿地登録準備期	ふゆみずたんぼ導入 および技術確立	・2003：蕪栗沼地区農業・農村研究会（ふゆみずたんぼプロジェクト）を組織 ・土壌調査や水生動植物の生息調査を実施 2005：「蕪栗沼・周辺水田湿地保全活用計画」策定	・ふゆみずたんぼ 交付金（2012 年農水省にて 環境直接支払 として全国化）
第3期 2006～ 2008年	地域事業者との連携。 地域におけるラムサール条約登録湿地拡大期	市町村合併に伴い、 田尻町の政策・制度を大崎市に移行	・市総合計画等の柱のひとつとして「自然と共生するまち大崎」を位置づける ・「化女沼」ラムサール条約登録 ・ふゆみずたんぼ普及組織「NPO法人たんぼ」設立	「自然共生推進係」の新設
第4期 2009年 ～	地域外におけるふゆみずたんぼ普及啓発期	ふゆみずたんぼ、生きもの調査の各地での普及	佐渡、豊岡との地域間連携による生きもの共生型農業の普及・啓発	
第5期 2011～ 2012年	震災復興とワイズユース、生物多様性の普及啓発期	・津波被災水田の再生 ・震災復興 ・命を大切にす価値観・暮らし方を発信	総務省・緑の分権改調査事業、被災地復興モデル事業の実施	
第6期 2013～ 2015年	世界農業遺産登録をめざす大崎モデルの確立	・有機栽培＆生きもの共生農業をめざす基準、市内普遍化 ・次世代育成	・「水田を核とした生物多様性向上・大崎モデル」構想の検討 ・次世代育成組織「おおさき生きものクラブ」設立（会員219人） ・世界農業遺産システム登録を目指す	

第1期 ふゆみずたんぼ導入以前

～渡り鳥飛来数増加対策～

マガン飛来地の変遷と一局集中による課題



日本に渡来するマガンの8割以上が宮城県の伊豆沼、蕪栗沼で越冬。個体数は増加したが、生息地が増えない

水鳥越冬群の一極集中化

感染症被害

個体群絶滅
リスクの増大

食物資源
の不足

農業被害

越冬地分散化が必要

地域内での対立～人が大事か？ 鳥が大事か？～

- 渡り鳥は**害鳥(食害)**
- 沼は水を引くのに**大事(沼が深い方が良い)**



農業者



対立

- 餌場となる**広い田んぼ**
- 広い**ねぐら(浅い沼)**が**大事**



マガン

- ガンや沼の**重要性を理解**すべき
- 環境を激変させる**浚渫**には**反対**だ

- 重要性を認識しつつも
遊水地による**住民の安全**が**大切**
農業被害も見**過ごせない**状況
- 農業の**活性化**の方法を**模索**



大崎市



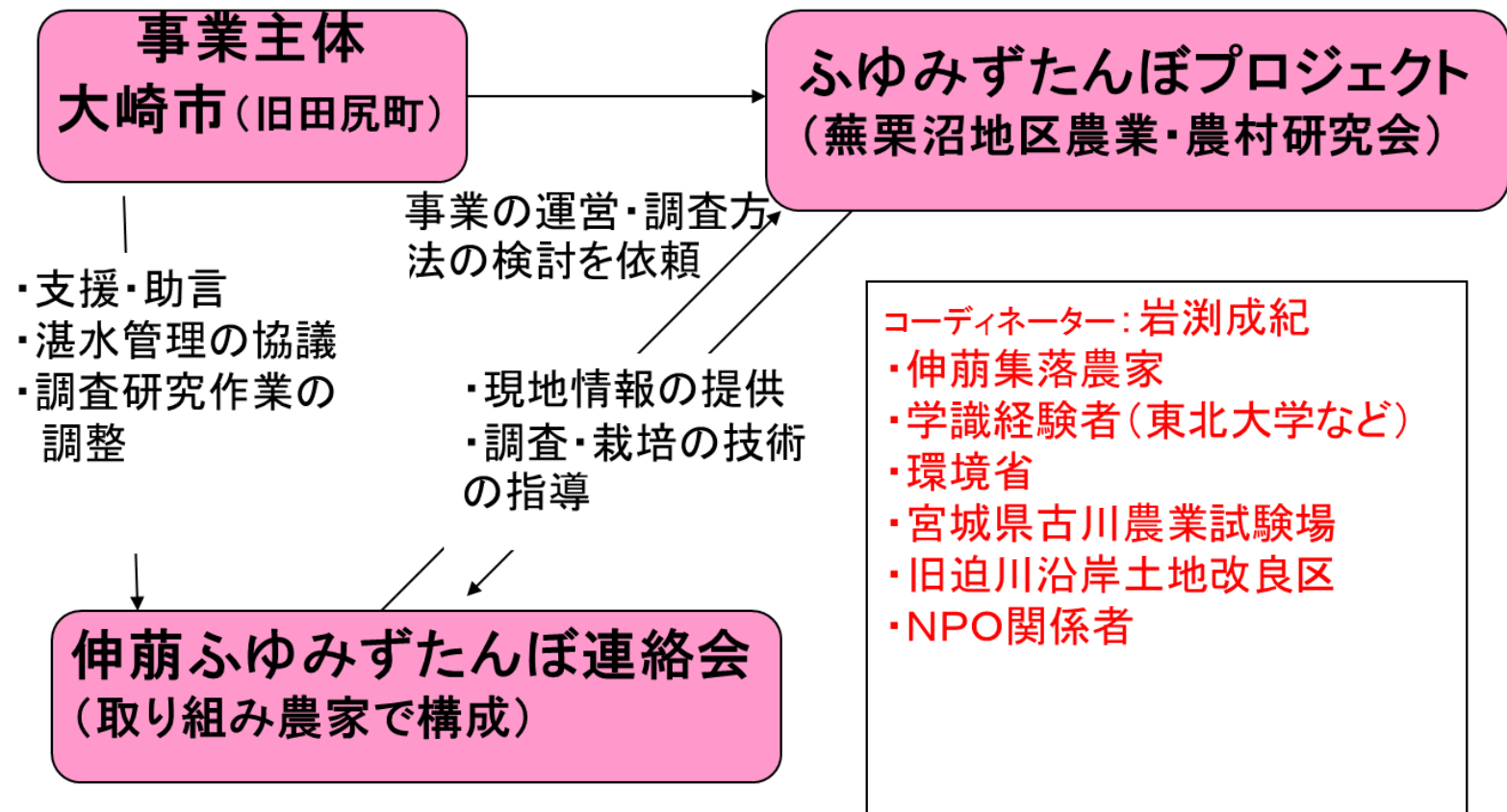
NGO

(自然保護団体)

ラムサール条約どころか、県鳥獣保護区の指定もままならない状況

第2期 ふゆみずたんぼ導入及び技術確立 ～「ラムサール条約」と登録準備～

- 2003年田園自然再生支援事業（農林水産省）を活用し、1998年秋から個人が米の販促活動の一環として実施していた「水田冬期湛水」を「ふゆみずたんぼ」と命名し、自治体として普及することを決定
- 特に、渡り鳥との共生が求められ、食害が多く、反対する農業者の多い蕪栗沼の周辺水田農をフィールドに導入プロジェクトを始動



対立から共生へ

マイナス要因を減らし、プラス要因をつくりだす施策



NGO
(自然保護団体)

CEPA活動と専門的な立場からの指導・助言

- 市民や小中学校で、蕪栗沼と周辺水田の重要性の普及
- 渡り鳥の生態を正しく理解した食害防除の手法・情報の提供
- 農家のメリットの検討（ふゆみずたんぼ・雁の観察会）渡り鳥による付加価値を提案

食害保障条例（1999年～）

JAS有機認証などの第三者認証費用支援 30,000円/人（有機栽培実践農家）

補助教員の派遣（2001年、2002年）

NGOスタッフを小中学校に派遣。総合学習・教科の支援として、環境教育を導入

ふゆみずたんぼ交付金（2004年～2009年）8,000円/10aを助成

蕪栗沼の重要性が少しずつ浸透⇒農家がメリットを模索

ふゆみずたんぼの集団実施（2003年～）



大崎市

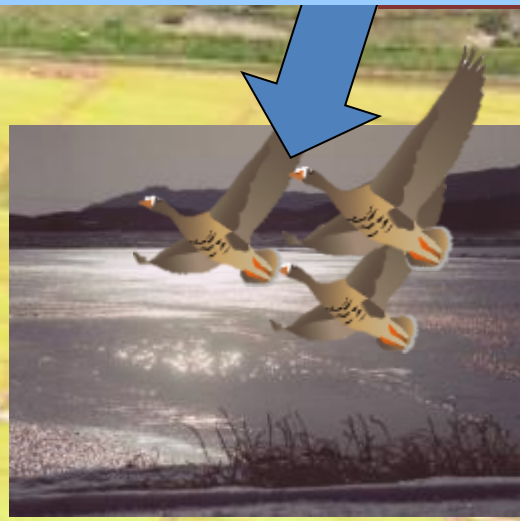


農家

渡り鳥との共生を育む「ふゆみずたんぼ」

周辺水田を「冬期湛水」することで、ねぐらを分散
・ 拡大し、水質の改善と越冬環境を整備

- 雁（水鳥）を利用した農業；蕪栗沼周辺
 - 付加価値のあるお米を生み出す
 - 雁に選ばれたたんぼでとれたお米（安全・安心の証）
 - 再生産可能な稲作が定着、雁の餌場も守られる





〔湿田にすむ生き物〕 = 生息環境の復元

- ・ 渡り鳥のねぐらや休息の場の創出
- ・ 微生物から水鳥まで生物多様性が高い

〔農業〕 = ふゆみずたんぼ農法

- ・ 抑草
- ・ 生物多様性を活用した栽培方法には付加価値がある

〔農業〕と〔自然〕の共存・共生

- ・ 生き物の力を活かした持続可能な循環型システム
- ・ 環境負荷の低減と湿地環境の保全

「蕪栗沼・周辺水田」の誕生！

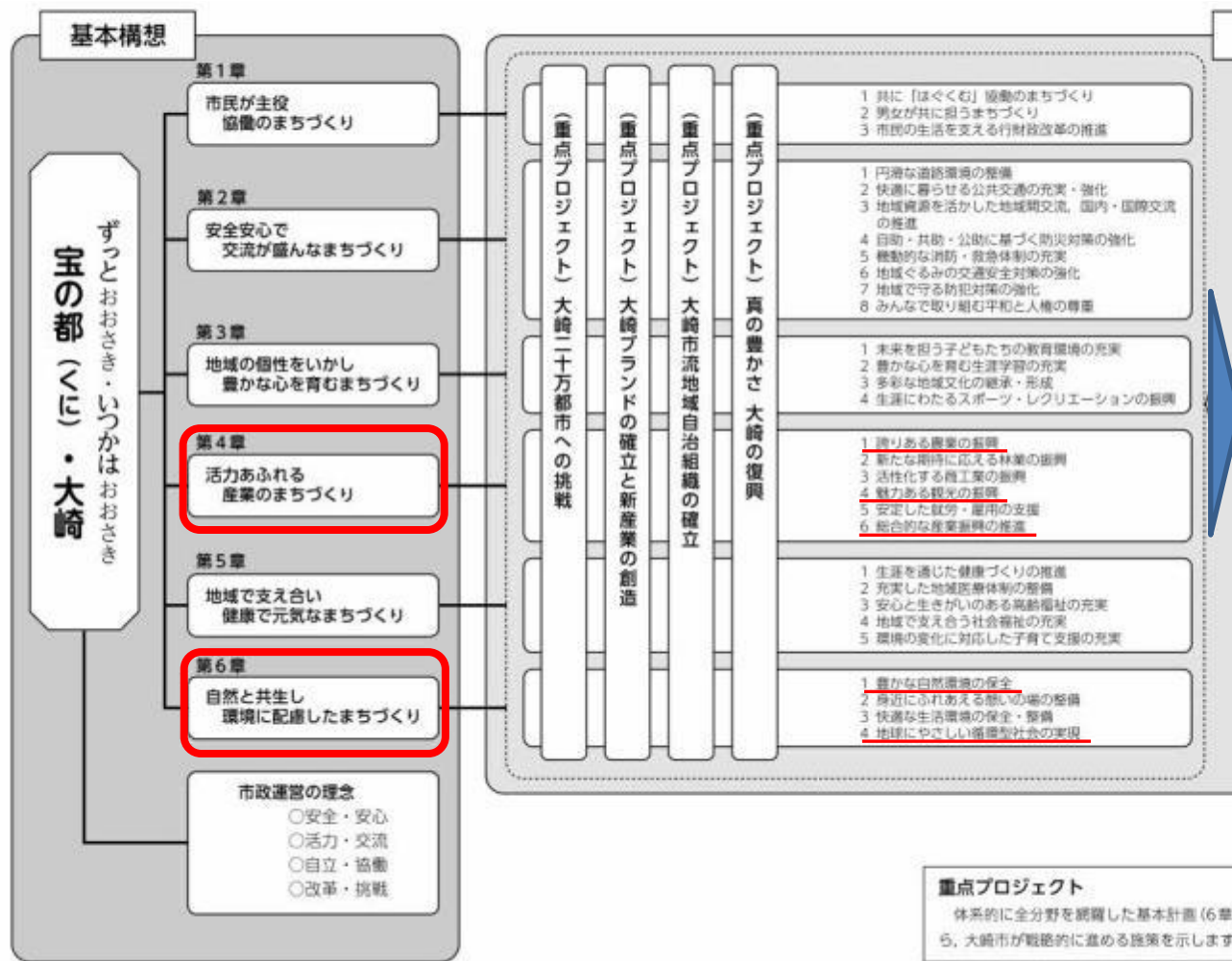


- 周辺水田を広く含み、
水田の名前が入った
世界初のラムサール
条約湿地
- 水田が生産の場とし
てだけではなく、生
物の多様性を支える
重要な場所として認
識された

第3期 地域事業者との連携

～地域におけるラムサール条約湿地拡大期～

合併後も旧田尻町の取り組みは、大崎市へ引き継がれる



蕪栗沼・周辺水田 保全活用計画の策定(2008)



ラムサール条約の趣旨である「**湿地の賢明な利用(ワイズユース)**」を主眼に

- 資源の保全
- 農業、観光など産業経済活動
- 地域の活性化
- 次代を担う世代の環境教育
- 持続可能なシステムの構築
- 他地域との連携(近隣市、広域連携)

地域企業との連携



新たな条約湿地「化女沼」の登録



地域住民から蕪栗沼・周辺水田での取り組みをモデルとした「化女沼」のラムサール条約湿地への登録要望

- 市組織内に専門部署として**自然共生推進係**を新設
- ラムサール条約第10回締約国会議で本市2カ所目の条約湿地として登録
- 湿地保全を推進する市民団体「**NPO法人エコパル化女沼**」が設立される。

- 渡り鳥との共生+農薬化学肥料不使用
- ストーリーのある米として販路拡大を推進
- 特に、地元企業(一ノ蔵、たじり穂波公社ほか)との連携を重視。
- 農業者側からの積極的な共生の姿勢を農業所得の向上という形で還元する仕組みのモデル化を促進

第4期 地域外におけるふゆみずたんぼ普及

～佐渡、豊岡との地域間連携による生きもの共生型農業の普及～

- 本市の取り組みにより得られた結果・成果を全国に普及するため、2003年に組織した「ふゆみずたんぼプロジェクト」を核に2006年「NPO法人田んぼ（理事長：岩渕成紀）」の設立を支援。
- ふゆみずたんぼを核とする生物多様性の向上に取り組む先進自治体との広域連携を推進

環境に配慮した栽培技術とブランド化連携



環境教育プログラムの連携

世界一田めになる学校in東京大学 H22～

- 主催 大崎市、豊岡市、佐渡市
3市の子供たちが東京大学を会場に会場の人たちと授業形式で水田の生物多様性の重要性について学習。



大崎市から全国へ、そして世界へ

ラムサール条約湿地『蕪栗沼・周辺水田』『ふゆみずたんぼ』
水田の湿地としての機能に着目した持続的な
大崎市の取り組み

佐渡市（トキの里）や豊岡市（コウノトリの郷）の鳥類の野生復帰に向けた生息環境整備のひ
とつとして全国に波及、大きな取組みとなる

ラムサール条約COP10（韓国）
日韓NGOが牽引役となり水田決議が採択

水田＝生産性の低い場所
人間を含め、多くの命を支える重要な場所へ
農業の価値観が変化

本市の生物多様性に配慮した取組みを国内外
に情報発信し、本市の農産物の価値を高める

水田保全決議を採択

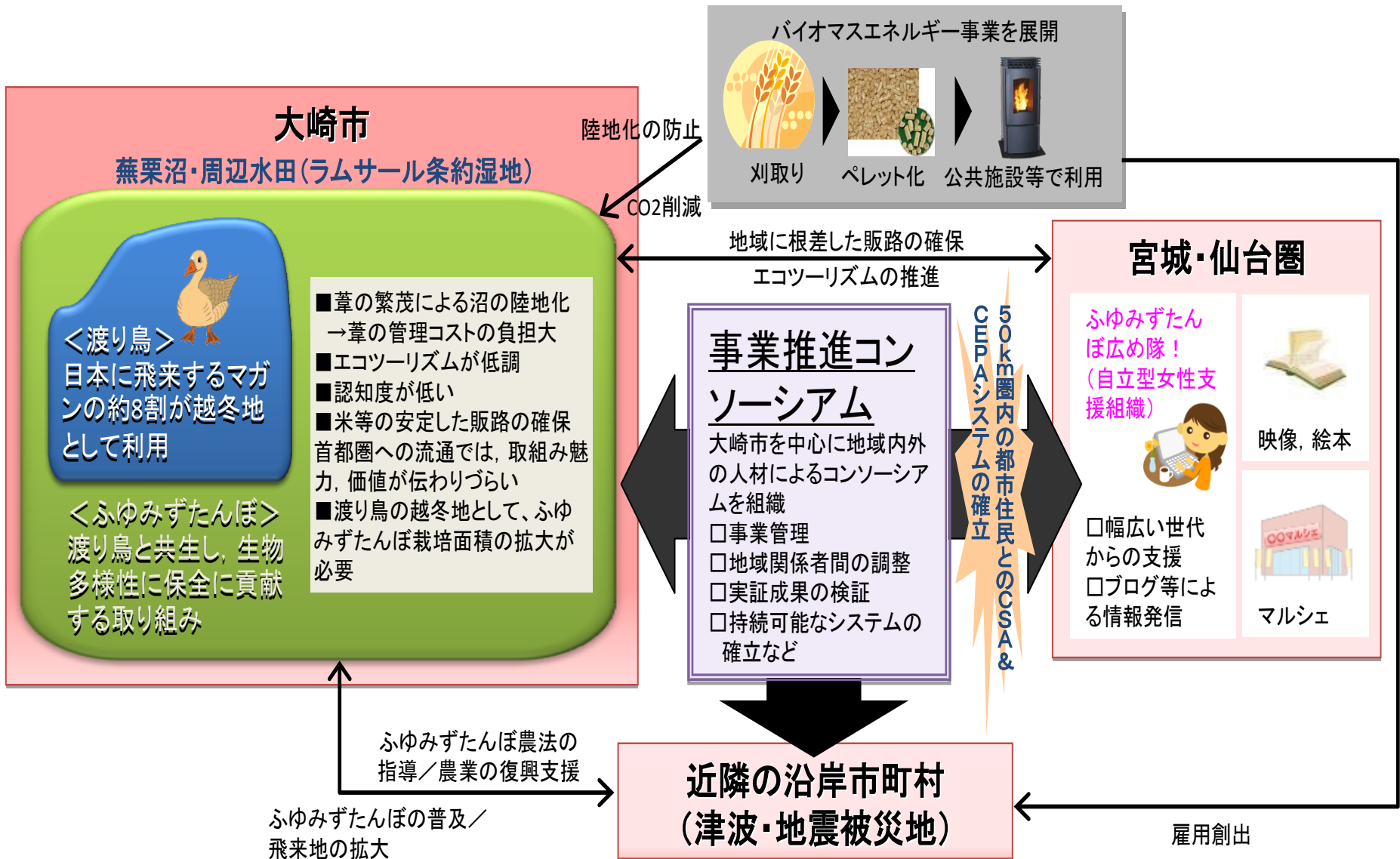
ラムサール会議 日韓が共同提案

【宮原（韓国南部）4日共同】国際的に重要な湿地を保全するラムサール条約の第十回締約国会議は四日、韓国昌原市で最終日の本会を開き、水田の重要性を再認識し、生物の多様性を増すような計画づくりを求め、日韓共同提案の決議を採択した。水田は「人工的な湿地」としてラムサール条約の保護対象に含まれるが、最終的に各国の要請が成立した。

決議は、水田が世界の多くの場所で見られるが、本会では、急速に進むグローバル化による水田の減少を懸念し、水田が世界の生態系破壊を防ぐために、多くの場面で重要な役割を果たしているとして、適切な農法を普及し、水管理で保全を進めるよう各国政府に訴える内容、農業政策などをめぐり、昌原宣言を採択し、八日までの日程を終了した。韓国政府によれば、同国は二〇二二年のラムサール条約の締結を期して、水田の保全に力を入れることとしている。

昌原市は、水田の保全に力を入れている。昌原市は、水田の保全に力を入れている。昌原市は、水田の保全に力を入れている。

第5期 震災復興とワイズユース ～生物多様性の普及啓発期～



映像・絵本・WEBサイト（2011年度）

●映像

- ・野生動物と人の営みの映像化
(静的な情報)
- ・映像は、**ため息がでるような自然の
美しさ**を5分のショートムービーで表現



●絵本

蕪栗沼とふゆみずたんぼの取組み
をテーマとした絵本を作成(作:葉祥明)

●WEBサイト

- ・基礎情報+最新活動情報(動的な情報)
- ・プロジェクトの進捗を広報するWebサイト



津波被災水田のふゆみずたんぼ復旧

ふゆみずたんぼ農法による米づくりと生きものとの共生技術を活用して、

- 塩害抑制効果の実証
- 技術の普及
- 水田再生手法の確立
- NPO法人間の連携体制の構築
- 復興に向けた生業支援手法の提案
などの成果があった。



マルシェ・ツアー実証、PR



蕪栗沼・ふゆみずたんぼ美味ツアー

マルシェ・販促活動



ビオファ(ドイツ)出展



丸の内プロモーション（2012年11月）

新丸ビル6F丸の内ハウス「ムス
ムス」およびライブラリーにてプ
ロモーション実施(11/19~25)
試食交流会、限定メニュー提供



第6期 「世界農業遺産」登録をめざす大崎モデルの確立

FAO世界農業遺産システム（GIAHS）登録に向けて

マガンなどの渡り鳥を育む大崎地域周辺の水田農業（仮称）

生物多様性・生態系

ガン類の生息条件は安全なねぐらとなる広い沼と餌場となる広大な水田がセットで存在する豊かな自然環境。かつて絶滅が危惧されたガン類の大半がその環境を有するこの地域に飛来。



食料・生計の確保

江戸時代には、江戸の米相場を左右するほどの生産量を誇り、現在でも主産地として存在



数千年前から連綿と続く広大な水田地帯で宮まれる水田農業



農村文化・価値体系

- ・里神楽や獅子踊り
- ・湯治文化
- ・竹工芸・こけし・漆器
- ・釜神信仰



知識システムと適応技術

- ・冬期湛水（ふゆみずたんぼ）
- ・糞尿等を利用した資源循環システム
- ・昔ながらの凍り豆腐の製法



景観・土地・水資源

- ・広大な田園と屋敷林が織りなす風景
- ・中山間部の水田・川・森林が織りなす里山の風景



おおさき生きものクラブ発足

対象：大崎市在住の小・中学生
内容：生き物が好きな子供たちの学外活動

環境教育イベントに関する「情報提供の一元化」と専門プログラムの作成・実施

- 市内の全小・中学生（約1万1千人）が対象
- 生きものクラブ会員へのイベントチラシ郵送
- プログラムを市内NPO法人6団体と市との協働で作成・実施
- 学校教育での活用を意識しつつ、校内学習向けシラバスを作成



登録児童

219名 (2014.1.31現在)

< 持続可能な地域を形成する

3側面からのアプローチ >

- 環境：ラムサール条約湿地の自然保護とワイズユース／沼や周辺水田における生物多様性／生きものと共生する農業モデル／ふゆみずたんぼの他地域への波及
- 社会：多様な主体の連携／主に地元の子供を対象とした生物多様性学習
- 経済：都市部でのプロモーション／地元酒造との連携による商品開発（農商工連携）／国内外での販路開拓

大崎市ふゆみずたんぼのオリジナリティ、 差別化ポイント

1. 水田を「農業湿地」として機能に着目。水田の新たな価値を創出し、ラムサール条約湿地史上初の「水田」を冠した条約湿地登録につなげた
2. 農業者が核となり、NPO、行政職員共同による生きもの調査
2006年より夏期は水田の生きもの調査、冬期はガン類の水田利用に関する調査を実施
3. ふゆみずたんぼ普及に向けた全国拠点組織としてNPO法人田んぼの市内設立を促進
4. ふゆみずたんぼによる津波被災水田の再生実証等の震災復興手法への利用
地元NPO田んぼによる2011年からの同取り組みを行政としてサポートし、2013年には南三陸町と連携し復興推進プロモーションを行った。

※NPO田んぼは、「生物多様性日本アワード」（イオン財団主催）にてグランプリ受賞（2013年12月）

5. 生物の多様性を育む水田農業へのこだわり
「ふゆすみだんぼ = 水田冬期湛水 + 農薬化学肥料不使用栽培」を定義化
市として有機JAS認証の促進（支援制度構築）、大崎市発祥の品種「ササニシキ」栽培への注力
6. 渡り鳥マガンが飛来する農村景観の保全
国内でここにしか無い景観およびふゆみずたんぼと生物多様性をテーマにしたメディア（映像、絵本『渡り鳥からのメッセージ』の制作と普及（展示会等の開催）
※「リバイブジャパンカップ」にてカルチャー部門コミュニケーション グランプリ受賞（2014年2月）
7. 生物多様性学習による次世代育成
蕪栗沼・周辺水田での校外学習ノウハウを元に、学校教育の中に生物多様性学習を導入。

映像へ

<http://kabukuri-tambo.jp/movie/>



ご清聴ありがとうございました